

緒 言

山田 宏

Hiroshi YAMADA

和歌山県立医科大学
整形外科科学講座

昨今、「人生 100 年時代」という概念がブームになっている。この概念の登場は、「自分の人生は、せいぜい長生きしても 80 年程度」と考えていた人々に対して、大きな衝撃を与えたに違いないと思う。なぜなら、80 年ですら健康を保つのが難しいのに、さらにあと 20 年となると、“本当に自分の健康は大丈夫かな”と、不安な気持ちを抱く人が大多数だと考えるからである。人生 100 年時代を迎え、今後ますます、健康寿命の概念が重要視されるであろう。

現時点で、わが国の平均寿命と健康寿命の間には約 10 年の差が存在する。「人生の最後の 10 年が介護生活」という衝撃的な事実は、超高齢社会に突入して明らかになった新しい課題である。このため、われわれ医療人は総力を挙げて、国民の幸せのために健康寿命延伸に取り組まなければならない。

さて、健康寿命を延伸するためには、手術は必要不可欠だが、現在、80 代の脊椎疾患が急増している。その手術適応、術式選択、術前・術後管理など重要な課題は多く存在する。一般的に、脊椎手術は、手術侵襲が大きくなればなるほど、そして、高齢になればなるほど、その周術期合併症や致死合併症の発生率は高まる。よって、超高齢社会に突入したわが国では、安心・安全な低侵襲手術の研究と開発が、喫緊の課題とされている。

本誌上シンポジウムでは、超高齢社会における脊椎手術をテーマに、これらの課題をどう捉えるかについて、各方面の低侵襲手術のエキスパートの先生方に検討をお願いした。読者の方々の今後の日常臨床にお役立ていただければ幸いである。